「闇に輝く光」

イザヤ書 9:1−16
ヨハネによる福音書 1:1−5

２０２３年１２月１０日
野村　友美 師

＜アドベント２週目に入って＞

クリスマスを待ち望む待降節、アドベントの第２週目に入りました。燭台のロウソク２本に、火が灯っています。今ぐらい明るい中だとぜんぜん目立ちませんが、もし礼拝堂が暗かったら、きっとこのロウソクの光はとても眩しくて、頼もしく見えるだろうと思います。

先週、私は初めて夜に暗くなってから車を運転しました。通りなれた道でも、暗い時に走るのは本当に怖いものですね。もちろん街灯もヘッドライトもありますから、真っ暗な中を走ったわけじゃありません。それでも、横の薄暗い道からいきなり誰か出てくるんじゃないか、見えにくくなってるものがあるんじゃないか、ってドキドキしっ放しで、つくづく光のありがたさを痛感しました。

何も見えない真っ暗闇に、光が輝く。

それはとてもびっくりさせられる、でも同時に心の底からホッとする、そういう出来事なんじゃないでしょうか。

「闇の中を歩む民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。」

闇の中、死の陰の地、暗くて当たり前だと思っていたところに、光が輝いた。私たちを驚かせてドキッとさせる、でも心からホッと安心できる、そういう光として、神様からの救いが私たちのところにやって来た。今日の聖書の言葉はそう語っているんです。

＜闇の中を歩む民＞

この言葉が語られた当時、ユダヤ民族の国であるイスラエルは、北イスラエルと南ユダという二つの国に分裂していました。そしてイスラエルがあるパレスチナ地方は、アッシリアという強くて大きな国に侵略されつつありました。

北イスラエルはやがてアッシリアに滅ぼされて、土地は占領されて、生き残った人たちはアッシリアの支配下に置かれました。預言者イザヤがいた南ユダにも、アッシリアの軍隊の脅威が迫ってきます。国の大きさも強さも比べものにならない、他の国からの助けも期待できない、まさにお先真っ暗としか言いようがない状況の中で、イザヤは南ユダの人たちに今日の言葉を伝えたんです。しかも「光が輝くだろう」という予告じゃなくて、「光が輝いた」と言い切ります。

不安と恐怖の暗闇を歩いている民は、大いなる光を「見た」。死の危険にさらされている者たちの上に、光が「輝いた」。

神様、あなたは深い喜びと大きな楽しみをお与えになって、人々はあなたの御前で「喜び祝った」。

これは「私たちは救われるんだ！」というイザヤの確信に満ちた宣言なんです。

繰り返しますが、この時のイザヤと南ユダの人たちは、喜び祝うどころか不安と怖さの真っただ中にいました。どう考えても勝てる見込みはないし、戦いで殺されるか、もし生き残っても捕虜に

なって支配されるしかない。
誰からの助けも期待できない、希望の光なんか一筋も見えない。
そんな絶望が、暗闇のように人々の心を覆っていました。喜べることはまだ何も起きていないし、期待できそうにも思えない。でも神様は、私たちを救い出すとお決めになられた。
だから闇に輝く光のように、神様からの救いが私たちを照らす日が来る、という確信をイザヤはみんなに伝えているんです。
　このイザヤの言葉を聞いた人たちは、どんな風に感じたんでしょうか。まずは、みんなビックリしただろうと思います。こんなお先真っ暗な状況なのに、「光が輝いた」だって？と驚いてから、「そうか！」って素直に喜んで希望を持ったのか。
「何の根拠もないのに、おめでたい奴だな」って呆れたのか。「無理だと思うけど、もしかしたら…」って、疑いながらも期待したのか。
いろんな人がいろんな思いをもって、このイザヤの言葉を受け止めたでしょう。
「もしあなたたちが神様に期待するなら、神様はあなたたちを救おうとして動いてくださるだろう」とは、イザヤは言いません。
彼が伝えているのは、救いの条件じゃないんです。素直に期待する人にも、ぜんぜん期待する気になれない人にも、疑い半分期待半分の中途半端な人にも。
闇の中を歩む人々、死の陰の地に住むすべての人に向かって、「光が輝いた」とイザヤは救いを告げ知らせました。
支配する者の武器を、神様、あなたはミディアンの日のように折ってくださった。兵士たちの靴や軍服、戦いのための装備は焼き尽くされた。
そう言って、イザヤは神様の勝利と平和を宣言しています。
「ミディアンの日」というのは、旧約聖書の士師記に描かれている出来事です。まだイスラエルが王様を持っていなかった時代、士師と呼ばれるリーダーたちが神様から選ばれて人々を治めていました。その士師の一人、ギデオンという人が神様の言葉に従って、たった３００人で敵のミディアン人の大軍を倒したというエピソードがあるんです。あの時のように、どんなに絶望的な状況からでも、神様は必ず私たちを救い出してくださる。
力づくで支配しようとする者から助け出して、平和を喜び祝わせてくださる。そのために「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた」と、イザヤは続けて救い主の誕生を予告しています。この予告も、聞いた人たちにとっては驚きだったでしょう。
だって「みどりご」って赤ちゃんのことですよ？一人の赤ちゃんが私たちに与えられた、なんて言われても小さくて無力な赤ちゃんにいったい何ができるの？って思いますよね。
今すぐ助けてほしいのに、そんな悠長な！と思ったかもしれません。それでも「神様が救い主をくださる」というイザヤの約束はそれから長い間、人々の希望の光になりました。
実際この赤ちゃんが生まれたのは、それから７００年ちょっと後のことになります。イザヤがいた南ユダは、アッシリアの侵略からは守られましたが、その後バビロニアという別の国に支配されて、それが７０年ぐらい続きます。

やがてバビロニアはペルシアという国に倒されて、捕虜になっていた人たちは解放されましたが、また強い国が攻めてきて、という出来事が繰り返されました。不安と恐怖を何度も味わいながら、理不尽な死の危険にさらされながら、人々はイザヤが宣言した「救い」を待ち続けていました。
私たちに本当の平和をもたらしてくれる救い主が来る。
神様の正しさと恵みを実現する、新しい王様が与えられる。この希望が、長い暗闇の中で、人々の心を照らし続けたんです。

やがて、今度はローマ帝国に支配されていたユダヤの片隅で「ひとりのみどりご」がひっそりと誕生します。立派な宮殿じゃなくて、馬が餌を食べる家畜の居場所で。
王様や貴族や神殿の祭司たちに祝われるんじゃなくて、羊飼いや外国人の学者たちにお祝いされて。

＜私たちの闇に輝く光＞

イザヤを通して神様が約束された救いは、ユダヤ民族だけじゃなくて、すべての国のすべての人を照らす光として、私たちの世界にやって来ました。どんな暗闇を歩く人にも、どんな死の陰の地を生きる人にも輝いて、喜びと平和の希望をもたらす光。

それが、今から２千年と少し前に生まれた一人の赤ちゃん、人間になった神様の独り子、イエス様です。新約聖書のヨハネによる福音書は、まず初めにイエス様のことを
こんな言葉で紹介しています。

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。

この言は、初めに神と共にあった。 万物は言によって成った。

成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。

言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。

光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。」（ヨハネ１：１-５）

この世界をお造りになって、すべてのものに命を与えた神様の言葉。神様の思いを伝えて実現する、そんな神様の言葉として働く御方が私たちの世界に来られた、とヨハネの福音書はイエス様を紹介します。
神様の思い、神様の愛を伝えて実現される救い主、イエス様の内に人間を照らす命の光がある。
その光は、私たちの暗闇の中で輝いている！
そうヨハネの福音書は私たちに訴えているんです。今、私たちが生きているこの世の中も、暗闇に覆われていると言っていいでしょう。
この３年間は新型コロナウイルスの蔓延で、日本だけじゃなくて世界中の国の人たちがまさに「死の陰の地」に住んでいました。私たちの体だけじゃなくて心も、不安と恐怖にじわじわ蝕まれて、状況が落ち着いてきた今でも社会全体が疲れ切って、余裕を失くしているように感じられます。
ウクライナとロシアで、ガザとイスラエルで、世界中のあちこちで、終わりの見えない戦争や紛争が続けられています。
多くの人が心も体も傷つけられて、命を奪われて、日常を奪われています。異常気象や大きな災害の

ために、親しい人も住む場所も生活の手段も
無くしてしまった人たちがおられます。
国の中で、地域の中で、属している集団の中で、家族の中でさえ、弱い立場に置かれて、理不尽な暴力にさらされ続ける人たちがいます。
それぞれの絶望の暗闇の中で、私たちが何よりも切実に「欲しい」と願うもの。
それは、私たちを心の底からホッと安心させて、暗闇から助け出してくれる光、
私たちが「希望」と呼ぶものなんじゃないでしょうか。
今すぐここから助け出してほしい！安心したい！と願い求めて、苦しい中で私たちはいろんなものにすがりつきたくなります。
普通の時だったら笑い飛ばせるような不確かな情報や、力強く聞こえる極端な言葉、根拠のない占いやおまじない。そんなものも、不安な時にはいかにも頼もしく光って見えるでしょう。
だからこそ、聖書は今この時「暗闇に輝く光」を私たちに伝えているんです。
どこへ導くつもりか知れない、行き詰まったら無責任に消え失せて、私たちを放り出してしまうような何かや誰かじゃなくて。
一人一人に命を与えて、慈しんで、生かしたいと願っておられる神様の愛こそが、
私たちの世界を照らす光なんだと、聖書は指差します。
この光は、限られた人たちだけに眩しく輝くような、華やかなスポットライトじゃありません。
絶望の暗闇を歩く人、死の陰の地に住む人を、心の底から安心させてくれる光。
すべての人を照らし出して、一人一人に命の希望をもたらす光。
それが人となられた神様の独り子、神様の愛をすべての人に輝かせる救い主、イエス・キリストという御方です。
イエス様を見つめるときに、暗闇の中を歩いていた誰もが心からの安らぎと希望を受け取って、神様の愛を喜び祝うことになる。
死の陰の地を生きる誰もが、神の国の新しい命を受け取ることになる。
この光を掲げて、それぞれの闇を照らされながら一歩一歩、神様の言葉を生きる者の群れが、教会なんです。
この新しい１週間も、私たちの暗闇にイエス様の光が輝いていますように。
どんな不安も恐れも超えて、心からの安らぎと希望を与えてくださる神様に期待しながら、一歩ずつ神様の言葉に従って行けますように。
今この時も暗闇の中におられる一人一人を、死の陰の地を生きるすべての人を、
イエス・キリストの救いの希望が照らしてくださいますように。
お祈りいたしましょう。